

外郎売ういろうり

注

- ※1 「いちりゅう」「ひとつぶ」2つの読み方がある。
- ※2 ネットなどで画像検索してみよう
- ※3 「しん」「くちびる」2つの読み方がある。
- ※4 「ちよっと」「いっすん」2つの読み方がある

解説（内容と読み方）と練習用動画（復唱の空白時間あり）は、YouTubeで公開しています。



拙者 親方と申すは

お立会の内にご存知のお方もござりましようが、

お江戸をたつて二十里上方、相州小田原一色町をお過ぎなされて、

青物町を上りへお出でなさるれば、

欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髪致して円齋と名乗りまする。

元朝より大晦日まで、お手に入れまする此の薬は、

昔、陳の国の唐人、外郎という人、我が朝へ来たり、

帝へ参内の折から此の薬を深く込め置き、

用ゆる時は一粒(※一)ずつ 冠の隙間より取り出だす。

よつて其の名を帝より「透頂香」と賜る。

即ち文字には頂き・透く・香と書いて透頂香と申す。

只今は此の薬、殊の外、世上に広まり、方々に偽看板を出だし、

イヤ小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと色々に申せども、

平仮名を以つて「ういらう」と記せしは、親方円齋ばかり。

もしやお立会の内に、熱海か塔ノ沢へ湯治にお出でなさるか、

又は伊勢ご参宮の折からは、必ず門違いなされまするな。

お上りなれば右の方、お下りなれば左側、

八方が八つ棟、面が三つ棟、玉堂造、

破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あつて、系図正しき薬でござる。

イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、

ご存知無い方には正真の胡椒の丸呑み、白河夜船、

されば一粒食べ掛けて、其の気味合いをお目に掛けましよう。

まずこの薬を斯様に一粒舌の上に乗せまして、腹内へ納めますると、

イヤどうも言えぬわ、胃・心・肺・肝が健やかに成りて、

薫風喉より来たり、口中微涼を生ずるが如し。

魚鳥・茸・麺類の食い合わせ、其の外万病即効在る事神の如し。

サテ此の薬、第一の奇妙には、舌の廻る事が銭独楽が裸足で逃げる。

ヒヨツと舌が廻り出すと矢も盾もたまらぬじゃ。

そりやそりやそらそりや、廻つて来たわ、廻つて来るわ、

アワヤ喉、サタラナ舌にカ牙サ歯音、ハマの二つは唇(※3)の軽重けいちゆう

開合爽やかに、アカサタナハマヤラワ、オコソトノホモヨロヲ。

一つへぎへぎに、へぎ干しはじかみ、

盆豆盆米盆ごぼう、摘蓼摘豆摘山椒。書写山の写僧正、

小米の生噛み、小米の生噛み、こん小米のこ生噛み。

繻子緋繻子、繻子繻珍。

親も嘉兵衛子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、子嘉兵衛親嘉兵衛。

古栗の木の古切り口。雨合羽か番合羽か。

貴様の脚絆も革脚絆、我等が脚絆も革脚絆。尻革袴のしつ綻びを

三針針長にちよと縫うて、縫うてちよとぶん出せ。

河原撫子、野石竹。

野良如来、野良如来、三野良如来に六野良如来。

一寸(※4)先のお小仏におけつまづきやるな、

細溝に泥鰯どじょうによりり。京の生鰯、奈良生真名鰯、ちよと四五貫目。

お茶立ちよ、茶立ちよ、ちやつと立ちよ。茶立ちよ、

青竹茶笕でお茶ちやつと立ちや。

来るは来るは何が来る、高野の山のおこけら小僧、

狸百匹、箸百膳、天目百杯、棒八百本。

武具、馬具、武具馬具、三武具馬具、合わせて武具馬具、六武具馬具。

菊、栗、菊栗、三菊栗。合わせて菊栗、六菊栗。

麦、ごみ、麦ごみ、三麦ごみ、合わせて麦ごみ、六麦ごみ。

あの長押の長薙刀は誰が長薙刀ぞ。

向こうの胡麻殻は荏の胡麻殻か真胡麻殻か、あれこそ本の真胡麻殻。

がらびいがらびい風車。

起きやがれ小法師、起きやがれ小法師、昨夜も溢してまた溢した。
たあぷぽぽ、たあぷぽぽ、ちりからちりから、つつたつぽ、

たつぽたつぽ一丁だこ。落ちたら煮て食お、

煮ても焼いても食われぬ物は、

五徳鉄球、金熊童子に、石熊・石持・虎熊・虎鱈。

中にも東寺の羅生門には、茨木童子が腕栗五合掴んでおむしやる、

彼の頼光の膝元去らず。鮎・金柑・椎茸・定めて後段な、

そば切りそうめん、うどんか愚鈍な小新発知。

小棚の小下の小桶に小味噌が小有るぞ、

小杓子小持って小すくって小寄せ。

おつと合点だ心得田圃の

川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚は走って行けば、

やいとをすりむく三里ばかりか、

藤沢・平塚・大磯がしや小磯の宿を七つ起きして、

早天早々、相州小田原、透頂香。

隠れござらぬ貴賤群衆の、花のお江戸の花ういろう。

アレあの花を見て、お心をお和らやぎやと言う、

産子這子に至るまで、この外郎のご評判、

ご存じ無いとは申されまいまいつぶり角出せ棒出せぼう眉に、

臼、杵、搥鉢、ばちばちぐわらぐわらぐわらと、

羽目を外して今日お出での何れも様に、

上げねばならぬ、売らねばならぬと、息せい引つ張り、

東方世界の薬の元締、薬師如来も照覧あれと、

ホホ敬って外郎はいらっしゃいませぬか。